

(外国語活動)

「Hello, friends!」

ーコミュニケーション能力を高めるための外国語活動の在り方を探るー

大阪市立新東三国小学校 神野恵子・中内慎二郎・内田智佳子

1. 研究主題設定の理由

本校では、大阪市の英語重点校として、平成25年度から3年間、週3回の英語短時間学習（以下、「英語タイム」と称す）に取り組んだ。フォニックスをもとにしたジングルやチャンツ、英語の歌やゲームを繰り返し行うことで、児童の英語への興味・関心が高まり、相手の英語を聞き取ろうという態度や自分の思いを英語で伝えたいという気持ちが育っていった。さらに、平成28年度から研究領域を外国語活動にし、コミュニケーション能力が高まるような45分間の活動を工夫する研究を行った。そして、本年度は、英語が外国語科として教科化されることを受け、新学習指導要領に示された目標にそって、研究主題を「Hello, friends!ーコミュニケーション能力を高めるための外国語活動の在り方を探るー」と設定し、過去4年間の外国語活動の在り方を見直し、児童のコミュニケーションを図る資質・能力をより高められるような研究を進めてきた。

2. 研究の概要と内容

具体的な改善点として、以下の4つに重点をおいて研究を進めた。

視点① 英語タイムと外国語活動・外国語科のカリキュラム作成と評価方法の見直し

- 「英語タイム」を捻出するための時間割を工夫した。平成25年度より、月・水・金曜日の朝8時半から45分までの15分間から「英語タイム」として短時間学習を行ってきた。さらに、本年度、月曜日の1時間目の開始時刻の15分間を「英語タイム」とし、職員連絡会や児童朝会・児童集会の時間を確保するようにした。1時間目が30分間になったが、授業時間数も不足なく進められている。
- 本年度、文部科学省から出されたカリキュラム（案）をもとに縦のつながりを重視した英語タイムの内容と教材計画を作成した。低学年については、1年生が3年生の、2年生が4年生の外国語活動につながる英語がインプットできるように単元の配列を組み替え、既習の英単語やフレーズに繰り返し慣れ親しむことができるようにした。
- 各単元のまとめとなる月末に Can-do 評価の振り返りカードを作成し、児童が、どのようなことができるようになったかを自分なりに振り返って記入するようにしている。同時に、指導者の反省としても用いている。昨年度までは「歌」「ジングル」「絵本」と教材について振り返る Can-do 評価を行っていたが、今年度からは、外国語活動でのコミュニケーションに不可欠な「聞くこと」「話すこと」「態度」についての Can-do 評価に編成し直した。各月の達成目標を（1）～（4）の評価項目の中の（3）に設定し、その月の指導を行うようにした。
- 英検 Jr.を実施し、児童一人一人が自分の英語の力について振り返る機会とした。

視点② 中学年・高学年の外国語活動の在り方を見直し

○ 指導体制の工夫

学年単位で学習することを基本とし、一人が ICT 機器を操作し、もう一人が All English で学習を進め、月単位や学期単位でその役割を交代する。このことにより、15分間を効率よく使うことができた。また、互いの指導法を学ぶ良い機会となった。

○ アクティビティの工夫

新しい英語をインプットする時には、勝ち負けのあるようなゲーム性の高いアクティビティを用いる。しかし、アウトプットする時には、児童にとって語彙や表現を使うのに必然性のあるやり取りになるような場面設定のアクティビティを工夫した。この活動を通して、児童は、英語を使って「伝えたい」「聞いてみたい」という気持ちを高めることができた。

○ C-NET の活用

C-NET の音声でチャンツやジングルを録音したり、アクティビティで用いる「やりとり」を担当と C-NET のデモンストレーションで録画したりした。これらのDVDを用いることで C-NET がいない時でも、児童にネイティブの英語に触れさせることができた。

視点③ 次の5つの領域を段階的に取り入れていくこと

- 「聞くこと」「話すこと（やり取り）」「話すこと（発表）」を中心とした活動に、少しずつ「読むこと」「書くこと」を加えていくようにした。

視点④ 外国語活動以外に、児童も指導者も外国語に触れる機会を多く設定すること

○ イングリッシュデー

1年間の学習のまとめとして、年に1回（3学期の土曜授業）、イングリッシュデーを設けている。いろいろな外国から来た C-NET や地域の英語堪能な方々と英語で主体的にやり取りを楽しむことができるようになった。中学生や保護者のボランティア参加もあり、年々充実してきている。

○ 教職員のための英会話教室

学期に1回、20分間5名程度で C-NET と英語に触れる機会をもっている。児童が英語を学ぶとき、どのような困り感があるか、指導者が感じ取り、指導法について考える良い機会になっているとともに、新しい教科書の中にある『Small Talk』でどのように話せばよいか参考になっている。

3. 研究の成果と今後の課題

（1）研究の成果

- 文部科学省の新・カリキュラムを参考に本校のカリキュラムを作り直し、英単語やフレーズの定着を図りながら、新しい学習内容を積み上げていくことができた。
- 45分間の外国語活動の在り方を見直し、児童にとって必然性のあるやり取りを工夫することができ、児童が積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度が育った。
- 5つの領域を段階的に取り入れることで、「聞くこと」「話すこと」から「話すこと（発表）」「読むこと」「書くこと」につなげていくことができた。

（2）今後の課題

- 児童にとって必然性のあるやり取りを今後も工夫し、児童のコミュニケーション能力を高めていく。また、さらなる C-NET の効果的な活用も考えていく。
- 進学先中学校下の小小連携・小中連携について積極的な取り組みを考え、英語学習の定着を図り、コミュニケーションの場を広げていく。